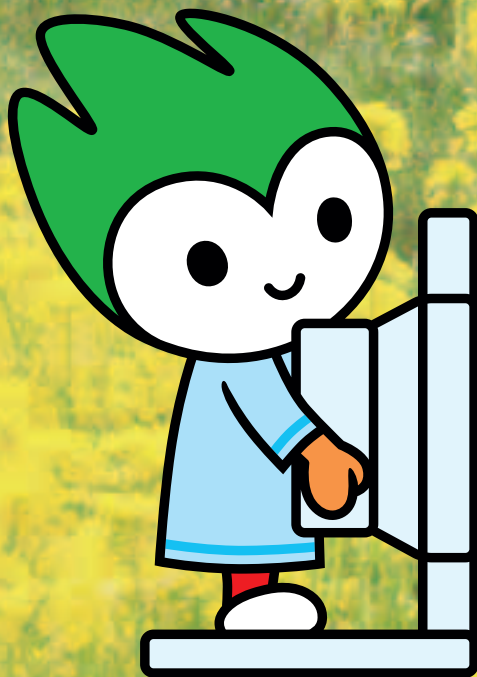


～県民の皆様から寄せられた貴重ながん検診の体験談～

がん検診早期発見事例集



山口県

①乳がん検診

[山口市：波多野 早苗さん（53歳）]

私が毎日を大切に生きているのは、がん検診で早期発見、早期治療ができたからです。

平成25年、我が家はリフォーム中でした。大工、電気工事などいろいろ忙しく、今年は、がん検診を受けるのを、止めようかなと思った時に、従姉の勧めもあり、時間を作ってがん検診に行きました。

マンモグラフィ検査で、0.5cmの乳がんが発見されました。昨年の検診では発見されなかったし、自己検診でも分からなかったから、自分のがんではないと思っていたから、がん告知はショックでした。

でも、早期に発見されたからリンパの転移がなかったのが嬉しかったです。忙しいからと検診に行かなかったら最悪な状態になっていただろうと思うと、時間を作ってでも検診に行ったことが幸いでした。

乳がんは4タイプあり、私のがんは悪性度が高い細胞でした。平成26年1月に、左側乳房全摘出手術、3月から抗がん剤点滴をしました。副作用で髪の毛はすべて抜けて、心が沈むときもありました。いろんなかつらをつけておしゃれを楽しみながら心が喜ぶことをしました。

そんな時に、乳がん患者の会「あけぼの会」に入会し、同じ痛

みを持つ方々に出会い、お互いに励まされました。前向きに生きていらっしゃる方に勇気をいただきました。

6月からハーセプチン分子標的治療の点滴を17回しました。1年間通院しました。手術後の治療が6月に終わったので、7月から美容師の技術を活かせる仕事を始めました。

乳がんの定期的な検診をしながら、好きな仕事ができる幸せ、本当に良かったと日々感謝しています。

がん検診で早期発見し、早期治療をすれば、がんは治療できます。

私は、平成24年に25歳の息子をがんで亡くしました。進行がんの恐ろしさ、息子の心身の痛み、苦しみ、悲しみに寄り添ってきました。本当に辛いです。

どうか自分のために、家族のために、がん検診を受けてください。



②乳がん検診

[山口市（52歳女性）]

平成26年11月22日、「いい夫婦のキャンペーン」夫婦2人で、41220（よいふうふ）円、ランチと花束つきで人間ドックが受けられるということで、夫と2人、初めての人間ドックを受けた。

順調に進み、乳房エコーの番。それまで、流れ作業のように進んでいたのに、あれ？なんか長くない？若い女性の先生、一言も発することなく、しかし丁寧にいろんな角度から写真を撮っている。

左に15分以上かかったらどうか、右はあっという間に終わった。人間ドックは午前中で終わり、久しぶりにゆっくりランチを楽しみ、帰宅して花を飾った。結果については、何も気にしていなかった。

3週間後、大きな封筒が届いた。結果にゆっくり目を通す前に「紹介状」と書かれた封筒が目に入った。「あ、何かひっかかった」、1年前に胃がんの検診でひっかかり、胃カメラによる再検査の結果「異常なし」だったので、今回もそんな感じかなぐらいに思っていたが、早速、病院に予約の電話を入れ、12月24日の予約をとった。

そしてクリスマスイヴ、マンモグラフィをとる。「5mm程度のものがあるので、念のため組織をとってみましょう。今までうちで何人もひっかかって、同じ検査をしたけれど、ほとんどの人は

良性だったし、ほぼ間違いなく良性でしょう。心配しないように。4時頃には結果が出ていると思うので、4時半頃病院に電話して。」と言われ帰宅。

家でゆっくりお茶を飲んでいたら、3時過ぎに電話が鳴る。「〇〇病院ですが、今からこちらに来られますか？」と言われ、「え、やっぱり乳がん？」という思いと「いや、さっき保険証出してない気がするから、保険証の確認かも？」という思いが交差する。

夫と2人で朝と同じ病院に行くと、すぐに通される。「残念ですが乳がんでした。」あとの言葉はあまり覚えていない。気がついたら涙が滝のように流れていた。大きさは5mm程度でも、全摘したほうがリスクは減る。どうしてもと言うなら温存でも良い。手術日までに決めれば良いと。

手術日やそれに関わる検査の日が、どんどん決まっていっていった。

5mmなのに全摘？早期発見で良かったと言っていたのに全摘？そして、よくよく聞いたら組織診ではなく細胞診のみの診断。

ネットや本で知識を得、いろいろ自分なりの考えがまとまるまでに3～4日かかった。年末ぎりぎりにセカンドオピニオンを決め、年始にセカンドオピニオンを受けた。

最終的にラジオ波焼灼術という、全摘でもない、すなわち切らなくてよい手術のできる病院を選択した。切らずに焼くという手術だったので、組織診よりもはるかに痛みは少なかった。

ラジオ波の手術ですんだのは、本当に早期発見だったからだ。

リンパ節への転移もなく最短の3泊4日の入院で、しかも退院

後自分で2時間運転して帰宅した。5日×5週間の放射線治療も受けた。

私は、トリプルポジティブというタイプで、抗がん剤も化学療法もホルモン治療も、すべて有効なタイプなのだが、本当に早期だったので、抗がん剤や化学療法は省略しようということになった。

乳がん告知から1年たった現在、1日1錠のホルモン剤の服用と、3ヶ月に1度の定期検診のみ。乳がんを知らない友人は、私を健康体だと思っている。

正直に言う。「こんな小さいうちに見つかったせいで、51歳の若さで乳がん患者になってしまった。1年後、2年後でもよかったのに」と思ったこともある。

でも本当に早期発見だったおかげで痛い思いも苦しい思いもあまりなくて済んだ。今は5mmサイズの乳がんを見つけてくれた検診センターのあの先生にとっても感謝している。

私は、もともと乳腺炎でしこりがあったため、自分で発見することはできなかったが、検診に行きさえすれば見つけてもらえることがある。マンモグラフィも、昔ほど痛くない。乳がんは、早期なら恐れることはない。だから検診に行って、早期で見つかる人が多くなると良いなと思う。

③乳がん検診

[宇部市（57歳女性）]

私はがん家系である。そして検診を受けるとよくひっかかってっていたが、いつもセーフだった。

5年前のあのマンモグラフィ検査ほど緊張感のないことはなかった。なぜならその頃は、食事と運動で7キロの減量に成功し、おまけに骨密度が低めなので、更年期対策もあり、ホルモン補充療法をしていたので、心身共に絶好調だったのだ。

だから、先生が首をかしげて、気になるところがあるから少し様子を見ましょう、とおっしゃった時は、のどがカラカラになった。

時期が悪かった。浪人中の上の子のセンター試験が迫っていたのだ。多分、ここが運命の分かれ道だったのだろう。別に、しこりがふれる訳でもないのに、娘の進路が決まってからでもよかったのだ。だけど、私は受験と、がんかもしれないというストレスの両方を抱えるのが嫌だった。

それで先生に、さっさと白黒つけてください、とお願いした。

年末年始なので、針生検の結果がでるのに時間がかかった。その間、私は図書館で、がん関係の本を読みあさり猛勉強した。さすがに恐くて、歯をくいしばって読んだ。

そして、今治療を開始したら、死なない、と確信し、再建までの道筋も自分の中ではできていた。だから、がん告知をされた時

は冷静だった。

2011年2月に手術、広範囲にわたり石灰化があるので、右胸を全摘した。病理組織診断は、硬がんで大きさは6ミリ、ホルモン受容体有り、リンパ節転移、HER2、切除断端、脈管侵襲は、すべて陰性、もちろん早期乳がんなので、治療は楽なはずだった。

ところが、以前のホルモン補充療法とは真逆のホルモンをカットする薬を飲みはじめた事と、母の介護が加わり、体がボロボロになった。

やがて母が亡くなり、ホルモン療法も本末転倒と言うことで止め、手術から4年経った昨春、たまたま参加した乳がんの患者会で、実際に自家組織を使って再建した方の話を聞き、講演をされた先生から敏腕の形成外科医の情報をいただき、私の外科の主治医の先生がすぐに紹介状を書いて、その日のうちに病院の予約も入れてくださり、とんとん拍子に話が進んだ。

7月に手術を受け、私は胸の膨らみを取り戻した。お風呂に入るとき、いつも感動する。まるで1点物の芸術作品のようだと、ちょっぴり誇らしい気持ちにもなる。

こちらがSOSを発信すれば、善意のバトンが次々に手渡されて、こんなにハッピーになれるのだ。

もうすぐ仕上げの手術をして、ミロ（見ろ？）のヴィーナスの誕生。これ全部県内での出来事、山口県も捨てたものではないです。

④乳がん検診

[防府市（66歳女性）]

平成20年秋、職場の昼休み、仲間と乳がん検診が話題になり、女性の多い職場。更年期で検診したら結果は大丈夫だったと友人が話し始めた。

私も5～6年前から乳房の2センチ位上に米粒大の硬いしこりがあるけど、小さいし、乳腺症の後よね・・・と話すと、神様だって・・・貴方が看護師でも乳がんがあるのよ。

一度検診したら安心出来るからと友人が勧めてくれたので、市の健康保健センターに電話し、直ぐに検診表を作ってもらい個人病院でマンモの検査が出来ました。マンモの検査が終わり、大きい病院を紹介しますから、受診して下さい、と説明して頂き、フィルムを持参してそのまま受診しました。

不安の中、2時間待たされ、医師から「病名知りたいですか？」と尋ねられて、「ハイ」と返事したものの、頭の中は真っ白。早期の乳がんです。手術の予定で検査をしますと、・・・うそでしょう・・・ガン=死 自分はガンになるわけないと受け入れるのに時間がかかりました。

温存で、との予定でしたが、術後の治療のことを考えて早期なら全摘したら終わりと考えていました。乳がんは乳管の中に入っていて、自己判断より摘出したら大きく1.8センチありました。

術後組織検査の結果、マニュアルに沿って抗がん剤を使用する

ことになりました。抗がん剤の副作用に苦しい思いをし、その後ホルモン療法を5年行いました。

その当時は、18人に1人と云う時代でしたが、今では、12人に1人になっています。2年に1回定期検診して早期に発見・早期治療することにより、自分らしく生きることができます。

自身の体験を通し検診を勧める運動に参加しています。私自身がこんなに乳がん検診に力を注いでいけるのは、娘が私の術後半年経った時、検診で乳がんが発覚したからです。34歳でした。

2回の手術で右乳房全摘。遺伝性の検査は行っていませんが、父親が胃がん。DNAが同じで、がん家系だから仕方ないと云う娘に、何とも云えない気持ちでした。化学療法を一年間やり、今では娘も元気になり、看護師として職場復帰できています。

私自身乳がんの知識を学び、ピンクリボンアドバイザーとして、少しでも治療中の方、自己検診の仕方などアドバイスを行っていきたいと思います。

(術後検査結果) タイプ 硬ガン ステージ1
グレード2 P g R陽性 HER2 陰性



⑤乳がん検診

[防府市(59歳女性)]

私のがんが見つかったのは2013年の春でした。毎年受けていた夫の会社の扶養家族の検診の案内がその年の春も来たので、「今年も受けてみる？」との夫の声かけにすぐ申し込みを出しました。

数日後、封書で検診を受けるに当たって、たくさんの項目が書いてある用紙を受け取り、受診する前日、1つ1つの項目の質問を読みながら現在の体の状態を確認して書いていました。

乳がんの項目になった所で、質問の中に「分泌物はありますか？あると答えた方、その色は透明ですか？色がついていますか？」という質問があったと思います。

それを確かめるため自分の乳首を指で絞ってみると右の乳房から黄色い液体が出てティッシュが黄色く染まりました。左の乳房を絞っても何も出ないのに「これはおかしい？」と思い右の乳房全体をさわると鈍い痛みがありました。

「もしかしたら乳がん？」と不安になりましたが、次の日が検診日でしたので予定通り検診を受けました。

けれど、その検診は集団検診だったため、結果は3週間ほど経たなければ通知が来ないと言われ、結果がとても不安でしたので、そのまま病院に電話をしました。

あいにく、その日は乳腺科の先生がいらっしゃる日ではなかった。事務局長の人が「そういう事なら、市内の乳腺専門の先生の所へ直ぐ行かれた方が良いでしょう。」と言われ、病院を紹介して下さいました。

その足で受診すると「詳しく検査しなければ分かりませんが、たぶん悪性でしょう。」と言われ組織を取り、「乳がん」と診断されました。

普通乳がんは乳首の上又は下又は左右にできやすく自分で見つけやすいのですが、私の乳がんはちょうど乳首の真下にあり、自分では見つけにくい位置だったようです。

ですが、もし検診を受けることを先延ばしにしていたとしたらあのチェック項目で自分の異常な分泌物も発見することができませんでしたし、そうなるとステージももっと進んでいたかもしれません。

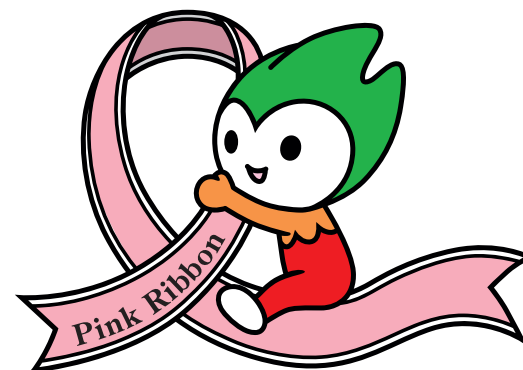
検診を受けたことによって、早期に乳がんを発見でき、手術、抗がん剤を受けて現在、術後2年半の検診をクリアできました。

まだまだ再発の不安はありますが、できてしまった事はしかたのない事として捉え、今までの生活を見直して前を向いて生きていこうと思っています。

乳がんの治療法は研究が進み、新しい薬が次々と開発され、たとえ再発しても、元気でがんばっておられる仲間を沢山知っています。検診を受けてがんが見つかったら、怖い、だから検診に行かないという方の声を聞いたことがあります。

現代は2～3人に1人ががんになる時代と言われています。乳がんは早期に発見できれば完治するがんです。

まずは、年に一回の検診を受けて、家族と自分のために健康日記を作ってほしいと思います。



①子宮がん検診

[防府市（55歳女性）]

私は、月経が不規則ながら54歳までありました。閉経を迎えた女性ならば誰もが経験することでしょうが、御多分に漏れず閉経したのかどうか分からないままの閉経だったと思います。

つまり、経血なのか不正出血なのか分からない時期が数カ月ありました。2～3日で終わることもあれば、1週間くらい続くこともありました。それは腹痛もなく、おりものシートが汚れる、それも1滴の出血くらいの微量な血液の量です。

おりものシートを当てておかなければ判別できないくらいの出血でした。それが約2ヶ月続き、さすがにこれはおかしいと思い（11月9日(月)）に婦人科クリニックを受診することにしました。

経緯を話し、内診、超音波、がん検診をすることになりました。私は毎年そのクリニックでがん検診を受けていました。前回の画像と比べると、素人目にはわからないくらいの白い小さな影があり、医師はそこがちょっと気になりますね、と言うことでした。

1週間後（11月16日）結果を聞きに行きますと、細胞診の結果が5、陽性でした。ここではこれ以上の治療はできないので、大きな病院を紹介します、と言われましたが、私自身まだ実感がありませんでした。

早速翌日（11月17日）病院を受診、再度内診、超音波、細胞診の検査をし、そこで初めて「子宮がん」と言われました。

MRI(12月1日)、CT(12月9日)、入院(12月17日)、手術(12月21日)の日が淡々と決められていきます。

事務的な事柄は着々を進むのに、私の心は立ち止ったままです。告知はとても簡単なものでした。

それから1週間、私は地獄でした。いろんなことを考えては涙し、悔やんだものです。

でもそれからは心が受け入れたのでしょうか、少しずつですが悪いことを考えなくなりました。

辛いのは私だけじゃない、家族のことを思うと泣いていられないと思うようになったのです。

手術は全身麻酔と神経ブロックとで4時間くらいでしたが、子宮と卵巣全摘出でした。術後は内臓を切り取るわけですから相当痛みましたが、その痛みも退院のころには和らぎました。退院は12月29日、家族と一緒に正月過ごすことができました。

そして、1月19日、退院後の初めての検診でした。検体の検査の結果、「子宮がんステージ1、M1」と言うことでした。初期の初期、転移も認められず今後の治療も必要なし。

これから1年間は月1回の検診、その後は検診の間隔も空くでしょう、ただこれまでは5年生存率であったのが、10年になりますから、今後10年は検診があるそうです。1月20日付けの新聞にも掲載されていました。フォローも長期になるのです。私の場合、まさに「不幸中の幸い」だったと思います。

子宮がんは進行が遅いとは聞きますが、それでも発見が早いに越したことはありません。11月9日に病院に行こう、と思えたのも神の啓示のようだね、と家族も友達も言います。

思い立ったら吉日です。今の時代、PCやスマホを開ければ大量の情報を得ることができます。私がここで書く以上の知識を持っておられる方も多いと思います。

しかし、どんなに知識があろうとも、まずは行動だと思います。私も仕事をしております。なかなか病院に行く時間がありません。

でも、なんだかおかしい、と感じたら、自分の感覚を信じて病院で診てもらうことが大切です。

子宮がんに関して言えば、閉経が遅い人、そして少しでも不正出血があるようなら、検診に行ったほうが良いと思います。不正出血を見極めるためには、おりものシートの着用を勧めます。

色物や柄物の下着では判別できないほどの微量の出血も必ずわかります。それは鮮血ではないけれど、透明や黄色のおりものでもありません。

私も今後の病状が実のところ心配です。きちんと検診を受け、自分の身体に耳を傾けながら暮らしていきたいと思っています。

ありきたりの言い方かもしれませんが「早期発見 早期治療」これにつきると思います。私の場合何度も言いますが、不幸中の幸い。

こうして笑って過ごせるのも検診のお陰だと思っています。

来月からは仕事に復帰します。私が元気で長生きすることが家族、友人、職場のスタッフへの恩返しだと思います。



①大腸がん検診

[萩市（69歳女性）]

私は6年前に夫を胆管がんで亡くし、がんには特別の思いを持っていました。現在は2人に1人ががんになるとも言われています。でもまさか自分のがんの宣告を受けるとは思ってもいませんでした。

平成26年12月15日、毎年受診している人間ドック当日、医師から便に血が混じっているので、早目に腸の内視鏡検査を受けるよう言われ年末の12月26日検査を受けました。

この検査は2時間かけて下剤を飲み、腸の中をきれいにするのが大変でしたが、検査そのものは思っていたより苦痛もなく進んでいたところ、内視鏡検査ではもう切除できない大きさ（3センチ位）のポリープが見つかったのです。

モニターを見ていた私にもはっきりわかるものでした。

『がんイコール死』が頭にうかび、ひどく落ち込んでいた私に看護師さんが「いつでも泣きにきていいよ。話を聞いてあげる。」と励ましてくださいました。

後日、病理検査で悪性の大腸がんと診断され、手術で切除することになりました。大腸がんは、がんの出来ている所で3種類にわかれている、私は、上行結腸がんで、小腸の近くに出来ているものでした。

便はまだ水分を多く含んでいて腸内をスムーズに流れ、排便で

きていましたので、何の自覚症状もなく普通に生活していました。直腸に近い所のがんができると便も固いので痛みがある人もおられるそうです。

検査を受けたのは市内の病院でしたが、医者より「ちゃんと治療するなら、どこの病院でも紹介するからよく考えて」と言われ、子供が住んでいる市外の病院を選びました。

手術日が、2月3日に決まり、手術前検査のため1月末に入院しました。腹部CT、胸部CT等いろんな検査を受けながら不安な気持ちで手術の日を待っていました。その間、私と同じような症状で入院されている方がたくさんおられ、私だけではないと心を強くしました。

手術前、下痢と浣腸で腸の中をきれいにし、腹腔鏡手術でがんを切除しました。手術時間は約3時間、術後1～2日は痛み、微熱、吐き気、おう吐、不眠でとても辛かったことを今でも思い出します。

3日目にはだいぶ楽になり、トイレも1人で行けるようになりました。腹腔鏡手術は傷口も小さく、入院期間も短くて済み、術後11日で退院できました。

入院中、担当医より手術、病理検査の結果の説明を聞きました。ステージ2、リンパに転移は見られないが、抗がん剤治療をしたほうが良いと言われ、抗がん剤治療を決断しました。

2週間抗がん剤を服用し、1週間休むサイクルで3週間に1度の通院を8回、約6ヶ月におよぶ治療を行いました。薬による副

作用は、髪が抜けるようなことはなく、手や足の皮がむける、爪が黒くなる等で、普通の生活が出来る程度のものでした。発見から1年が経過した今は、3ヶ月ごとに血液等の検査を受け、経過観察中で、がんとは長い付き合いになりそうです。

最後に、私の場合、自覚症状は何もないなか、便潜血の結果をうけ大腸がんの早期発見につながりました。もし検査を受けていなかったら、ステージ3～4と進み、他のがんの転移と生命の危険にさらされていたと思うとぞっとします。がんを見つけてくださった病院、手術をしてくださった病院の方々に感謝しています。

医療技術は確実に進んでいます。早期発見すれば、がんは怖い病気ではないとつくづく実感しました。是非、多くの方が、がん検診を受診され、早期発見につながることを心から望みます。



②大腸がん検診

[宇部市：藤井 悌一さん（81歳男性）]
「山口県がん対策協議会」患者会委員

我が国の国民の3分の1は、痔主であると言われてますが、私も排便の際、少量の出血と痛みがありました。

しかし、当時1年6ヵ月に1回、腸の内視鏡検査を受けており、特段の指摘もなかったので、「痔であろう」と思い、肛門科の受診をしていませんでした。

平成6年の秋、会社の健康診断で、検便の潜血反応がありましたので、内視鏡検査の時期を早めて受診をした結果、直腸がんと判明しました。

平成7年1月、東京の病院で、手術を受け、人工肛門の身となりました（当時60歳）。

直腸周辺には、血管や神経が集中しており、手術の難易度は高いと聞いていますが、お二人の先生方の優れた手技によって、良い人工肛門を造設していただきました。

お蔭様で、メンテナンスもスムーズで、術後21年間、元気に働き続けられていることは有難いことだと思っています。

東京の病院に同日入院した、同年配の男性とは、退院後も交遊を続けましたが、術後10年目に転移のため、亡くられました。

この方は、前年にも検便の潜血反応を指摘され、平成6年にも再度の指摘があったため、受診されたのですが、既に肝臓に転移していました。私自身のがんのステージも、3期に入っており、リンパ節転移がみられました。

もう少し受診が遅れたら、今日の「健在」は、なかったものと思われます。早期に発見して、対処することの大事さを痛感しています。



③大腸がん検診

[岩国市（61歳男性）]

会社で行われる健康診断の大腸がん検診で、6年前より、毎回便潜血でひっかかっておりました。

最初の2年間は、かかりつけの病院を受診し、大腸内視鏡検査を行っていました。

しかし、検査結果で2回とも異常が見られなかったことと、痔が悪く毎日のように痔からの出血があったので、痔のせいで便潜血にひっかかると思い込み、それ以降は大腸内視鏡検査をためらっておりました。

定年も近付いた頃、検診結果を確認している社内の看護師からそろそろ大腸内視鏡検査をするように勧められ、かかりつけの病院にて、大腸内視鏡検査を行ったところ、ポリープが見つかりました。検査中にポリープを採取し、病理検査へ提出するとのことでした。

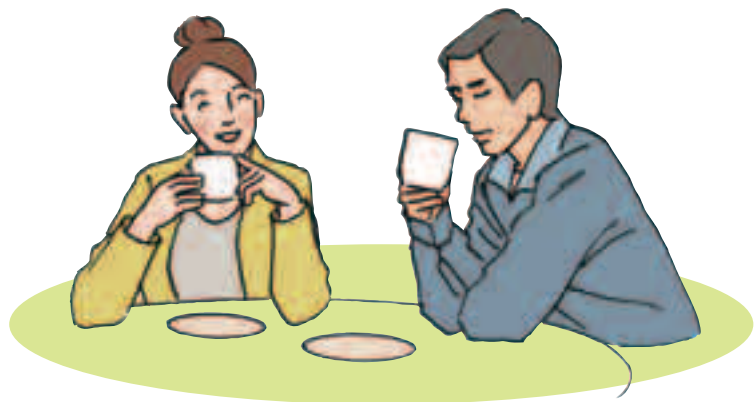
時期は8月、病院などお盆休みを挟むこととなり、3週間近く不安な日々を過ごしました。そして、結果を聞くため病院を受診、大腸癌でステージは3と4の間で、手術が必要と言われました。

その時の驚きと不安は、今でも忘れられませんし、気が動転していたせいか、妻へもどう話したのかも覚えていません。後から妻にこの時のことを聞くと、よく分からないことを言っていたようで、妻が直接病院に電話をかけ、事の次第を説明してもらい、話が分かったとのことでした。

主治医からは、手術をすれば大丈夫と言われましたが、子供の頃にした盲腸の手術以外、手術をしたことがなかった私は怖くてたまりませんでした。

大腸がんの手術は無事成功し、その後の検査でも異常はみられず、経過良好で日常へと戻ることが出来ました。

がん検診の大切さを、身をもって知った私は、それ以降、毎年夫婦で検診を受けています。



④大腸がん検診

[下関市（44歳女性）]

平成27年2月7日、44歳の誕生日、休暇中に以前から気になっていた排便時のごく微量の出血の原因をはっきりさせるため内科医院で大腸カメラの検査を受けた。「誕生日だし、ちょうどいい、検診は大事かなあ」とかなり軽い気持ちで検査に臨んだ。検査の翌日は誕生日だった。

私は、腸にカメラを入れることが不安で、前日はあまり眠れなかった。しかし、検査は苦痛なく終了した。結果を聞くため診察室に入ると、先生の表情は少し硬いように感じた。

「結果は半々です。」良性か悪性かどちらかと言うことだ。はっきりとした結果は6日後だった。まだ、心に余裕があり「家族で癌になった人はいないし、私が癌になるわけない。きっと大丈夫。」と思った。

2月13日、設備の整った大きな病院を受診した。1人で診察室に入ると、先生はハキハキとした口調だった。「下行結腸の腺癌です。治療を急いだ方がいい。」と告知された。その時は不思議と落ち着いていた。その日のうちに手術前の検査（心電図、血液検査、CT、肺活量の検査など）をすべて行った。

さまざまな不安が日々精神的に私を追い詰めていった。夜、眠れない日が多くなり考えると指先が冷たくなり体が震えた。

「まだ、死にたくない」と泣いた。こんなに涙が止まることなく出ることかと思うほど泣いた。

これからどれくらい迷惑をかけるか分からない。入院まで休まず勤務した。3月2日、精神的不安が頂点に達したまま入院となった。入院してすぐ主治医から病状と手術の説明があった。

病状として転移をしていない状態から腹部に癌細胞が広がっている状態までの説明があり、その後の治療方針の説明もあった。

手術は、腹腔鏡と言う下腹部に5か所ほど小さな穴をあけて行う手術で傷の治りも早く入院の期間も短い。手術中の症状によってお腹を大きく開く手術を行うと言う。

3月4日、家族に見送られ、12時30分くらいから手術が始まった。手術が終わり主治医の先生が大きな声で名前を呼び「手術成功したよ」と言ってくれたのを意識が朦朧としながら覚えている。

翌日、お粥とみそ汁と大根おろしだったが、食べたい気持ちはあるがほとんど食べられなかった。一日、一食分ほどしか摂取出来ずしばらく点滴を続けた。

徐々に空腹感を感じるようになり、食事が入院中の楽しみの一つとなった。病院の食事は野菜中心で毎日メニューを書きとめ今でも参考にしている。

術後8日目、癌細胞の詳しい結果が出た。癌の一番近い部位の一つリンパ節転移があると言われた。頭の中が真っ白になった。

再発の可能性を少なくするために抗がん剤で癌細胞を攻撃しやっつける治療を薦められた。

退院の日も近く仕事の復帰も考えていた。体調もよく予想もしていなかった。告知された時より落ち込んだ。しかし、先生は明るく「前にも言ったけど体のことは私に任せてほしい。あなたは治療するだけだから心配ないよ。」と言ってくれた。

3月16日退院した。これからの事や体調面に不安があったが自宅に戻るとほっとした。

普段は車で出掛けることが多いが、毎日30分ほど体力作りのため散歩を心掛けた。3月27日、退院後初めての外来受診だった。体調面は問題ない。抗がん剤治療は4月からの仕事復帰も考え吐き気など消化器症状の少ない内服治療に決めた。

同時に仕事復帰もした。復帰は少し早い気がしたが世の中にはがん治療により退職せざるえない方が多く不安だった。しかし、私の職場は心温かく迎えてくださって仕事のポジションも体に負担が少ないように配慮して下さった。

今現在、再発はなく以前と変わらない生活を送っている。私の症状は思ったより進んでいなかったが、もう少し早く検査をしていればと後悔している。

検査は苦痛を伴うのもあり病院に行くのは面倒になりがちですが異常が見つければ長い治療を要します。私は自分や子供の誕生日に検診に行くように心がけています。

これからの人生は考えもしなかった病気と向き合い、今まで関わってくれた方への感謝の気持ちを忘れず生きていきたい。

①胃がん検診

[下関市：加藤 寿彦さん（68歳男性）]

私は、県議になってから、議会で制度化されている健康診査を利用し、最低でも2年に1度（毎年の時も）は、病院で一泊二日の人間ドックを利用し、胃と大腸等の検査を受け、以前にも大腸のポリープを採ったことがある。

2014年10月9日～10日で一泊二日の人間ドックに入り、9日の午前中胃の検査を行い、サンプルを採られた。

10月23日に検査結果の説明を受けに行く。と胃がんの疑いがあり、10月28日に再検査をすることになった。担当医は、初期なので内視鏡で剥ぎ取ると説明した。

10月28日、胃の再検査を行いサンプルを採る。今後の治療方法について説明するので、11月6日、13時30分に来るように言われる。

11月6日、13時30分、妻と娘の同席で説明を受ける。医師がパソコンの画面を指し、「これです」といった後、「いや違う、こっちです」などのやり取りがあったことを記憶している。

それほど見つけにくく、私には画面を見せられても分からず、言われればそうかなと思う程度であった。

「悪性」と言われたが、良くぞ見つけていただいたものだと感心し有難いと思った。

手術も開腹ではなく、全身麻酔で内視鏡での手術と聞き、不安は感じなかった。

定例県議会が予定されていたので、議会閉会後の12月19日に手術を決めた。

12月19日、13時ごろから手術は始まり、1時間40分ぐらいかかったという。

途中で麻酔が切れ、痛みで暴れたようだ（かすかに覚えている）。病室に帰り、麻酔が切れると胃がねじ切られるように激痛が走る。主治医の指導で麻酔を打ち、また寝る。

20日の朝目覚めると、昨日の痛みが嘘のようになくなっていた。不思議である。入院は9日間、26日に胃の検査OK、27日午前中に退院することができた。

2014年2月17日 胃の検査

病院にて経過観察のため胃の検査を受ける。結果は良好、良かった。一安心である。

2015年10月28日 胃の検査

1年8ヶ月経つので、病院で胃の検査を受ける。異常なしといわれる。

定期検査に行ったことで、早期発見、早期治療が行われ、切腹の苦痛もなく、病院に19日に手術、9日間の入院で、27日午前中退院、28日には仕事が出来たことは、関係者の皆様のご尽力に感謝を申し上げたい。

がん検診の受診率が依然として低い。私の経験が参考になれば有難いと思う。

②胃がん検診

[下関市（54歳男性）]

私の「がん」発見は、平成24年6月末、職場で5年に1回実施される人間ドックを50歳で受診した時でした。

胃部内視鏡検査は苦しいと聞いていたので、これまでに検査の経験がなく、今回の人間ドックもエックス線検査を受けました。

その検査で異常があり、検査後の説明で「食道がんが疑われるので胃部内視鏡検査をした方がいい」と勧められました。

翌日、内視鏡検査により「食道がん」と診断され、治療方法は切除手術が適していると説明を受け、病院を紹介されました。

「がん」と診断された私の当初の気持ちは、「切れば治るさ」と安易なものでしたが、少しずつ事態の深刻さを受け止め、「がん」の転移、手術や治療、死への不安が頭に浮かんできました。

死の恐怖と家族との別れの悲しさや残していく家族への申し訳なさで、気持ちが膨らんでいきました。

そして、どうあっても元気になるぞとの思いを持ち、職場の上司へ「がん」と診断されたことを報告しました。

上司からは仕事よりも治療に専念するように言われ、理解のある職場に感謝しました。

大学病院では、更に詳しく検査をするため、内視鏡、CT、PET等検査を受けたのち、「胸部中部食道がん」であること、ステージは「II T2」との説明がありました。

治療方針として、「がん」になった食道を廓清することとし、頸部食道の上部から上部胃の3分の1を切除し、残りの胃は食道の代替えとして胃管再建し切除した頸部で吻合することになりました。

更に、胃管は、手術の安全性と再発時の治療を容易にするため、胸骨後を通すことになりました。手術方法は、患者への負担を軽減するため、縦隔鏡下切除術で手術することになり、7月末に約8時間に及ぶ手術を受けました。

手術は、心配された転移は確認されず無事に成功しました。手術後の抗がん剤治療はなく、現在は逆流性食道炎の防止薬を飲みながら定期健診を3ヶ月毎に受けています。

後遺症で、睡眠時には上体を約20度に起こさなければ、胃酸や食事の内容物が上がってきます。食事はゆっくりとよく噛んで食べるように気を付けていますが、ダンピングによる動悸・めまい・全身倦怠感・全身脱力感に見舞われます。

高カロリー・高タンパク質の食事を摂取するとダンピングはもとより下痢に見舞われ、食後はトイレに間に合うよう気にしています。

また、食事摂取量の低下による体重の減少や体力の減退、寒さによる体温低下時には手術創とその周辺がキリキリと痛みます。

人に「食道がん」に罹った話をすると、「自覚症状はどうだった？」と質問を受けることがあります。

「がん」になって思い返せば、ビールを一気に飲むと、ごっく

んと、下に降りずに上に戻ってくることや、「がん」の診断を受ける2年前には、時々胃の不調がありました。

当時は、強い痛みではなく、しばらくすれば治っていたので気にせずしていました。体重の変化はなく、毎年受診する職場のバリウム検査による胃がん検診では異常なく、その他の検査項目も正常値であり、健康人であることを自負していたので、まさか自分が「がん」であろうとは思いませんでした。

「食道がん」の検診は、胃部内視鏡検査が有効であると言われています。私の場合、職場で受診する胃部エックス線検査による胃がん検診は、食道の検診ではないので、早く発見されることがなかったのだと思います。

今回発見された「食道がん」の進行状態から、数年前から発症していたと思われませんが、胃部内視鏡検査を嫌がらず受けていれば、早期に発見できて、食道の切除までに至らなかったと後悔しています。

胃がん検診を受けるなら、胃部エックス線検査より胃部内視鏡検査を受けた方が食道など広範囲の検査を受けられるので、是非お勧めします。

私は、「食道の進行がん」の段階で発見されましたが、人間ドックの受診時はまだ自覚症状のほとんどない早期の方だったので、手術によって「がん」を廓清し、現在のところ転移もなく済んでいると思っています。

現在は、「食道がん」の手術から3年目が過ぎ、他臓器への転移が確認されていませんが、まだ転移する可能性があるので予断を許しません。定期検査では、検査結果が異常なしといわれて、いつもほっとしています。

「がん」の発見は早ければ、治療期間は短く、患者への精神的・経済的負担が軽減されると身をもって感じていますので、ぜひ皆さんも「がん検診」を受診していただきたいと、願いを込めてメッセージを送ります。

※厚生労働省は、平成28年度から、胃内視鏡検査を推進することとされました。(37ページ参照)

③胃がん検診

[周南市（71歳男性）]

私は周南市に住んでいます。年齢は71歳です。元の勤務先は製鉄所です。平成14年に退職しました。

そのときの職務内容は総務課庶担当で衛生管理者を兼務していました。その関係で平成6年頃、県産業衛生大会に参加しました。

その中の事例発表のテーマが「歯の正しいブラッシング」でした。その内容がとても良かったので、私の職場でも教育しようとその診療所の先生にフィルムを借りにいき、その時、先生から、胃がんの早期発見には、胃カメラ検診をなさいと言われました。

私はそれから、年1回胃カメラで胃検診をしていました。バリウム検診では検査費用が会社負担でしたが、胃カメラ検診では全額自己負担でした。しかし、早期発見ができるのであればそうは言ってもおられません。

私は、20歳より「ネフローゼ症候群」、平成6年52歳で肝炎を発症していましたので、月1の血液検査と年1回の胃カメラの胃検診をしていました。年によっては細胞を採っていたこともありました。

そして平成12年10月に治療し検査をしていた病院にいきますと、主治医から「検査の結果が、返って来ていますよ。」と言われました。

私は腎臓の血液検査の結果と思い、それは先週お聞きしましたと言うと、先生はいいえ胃検診の結果だと言われました。胃潰瘍の疑いです。わたしは「がんですか」と言いますと先生は「ハイそうです」と言われました。わたしは突然でしたが動揺はしませんでした。

そして、その午後から手術先の病院に紹介状作成のため、がんの部位を調べるのがんの告知をするために、家族と一緒に来て下さいといわれました。

長男が勤務明けでしたので、長男と病院に行きバリウム検診を受けると、がんが小さくて先生が何度かお腹を押さえて調べられましたが、がんが小さかったので、がんの部位を確定することができませんでした。

そして、病院で手術を受け、その結果がんの程度は1～10の中で1と言われ、がんの種類は粘膜がんでした。

胃検診は、胃カメラでと言われた先生に感謝しています
もちろん、がんを見つけてくださった先生、病院にも心より感謝しております。

その後は、胃検診は、胃カメラでと、家内と共に受診しています。今後とも続けたいと思います。

～最後に～ 「がんが私に教えてくれたこと」

[長門市:がん患者会「あいの会代表」沖村 恵子さん(60歳)]
「山口県がん対策協議会」患者会委員

父を前立腺がんで看取り 満中陰も済ませてホッとした時の事です。

久しぶりにゆっくりお風呂に入れたものですから 父の二の舞はしたくないと乳がんの自己検診をしていました。

すると左の乳房に硬いしこりを感じるのです。毎年人間ドックを受けていて異常がありませんでしたが、その年はまだ受けていませんでしたので「乳がん？」と、血の気が引きました。

仕事の休みの土曜日に外科を受診しましたら触診・エコー検診・マンモグラフィ・細胞診の検査があり、結果は後日という事でした。

1週間と経たないうちに病院から「検査結果が出ています」と電話があり、病院から電話があるという事は悪性？と思いながら受診しましたら、やはり「乳がんです。温存手術ができます。でも、うちでは放射線療法ができませんので紹介します。」と言われました。

ある程度覚悟はしていましたが、乳がんと言われるとやはりショックで、子供の進学や今後の不安が募ってきました。

病院から帰って1番先にした事は、生命保険や貯金通帳を見て、学費が払えるかどうか確認しました。

今では笑い話ですが、その時はやはり「ガン＝死」という思いが強かったのだと思います。

後にその時の事を振り返った時、大事な出会いがありました。

会計を終わったところで、総婦長さんにばったりお会いし、乳がんと言われたこととお話しますと、『新樹の会』という乳がん患者会を教えてくださいました。

東京の中野区を中心とした会でしたが、手術後早い時点からその会に参加したことで、自分の中にがんと共生の基礎を築けた様に思います。現在その会は自然消滅してありませんが、良いご縁を頂けたと総婦長さんに感謝しています。

患者会に参加した事をきっかけにして、がんについて自分なりに幅広く勉強しました。

そして「がんになる前と同じような生活をしていると、がんに負けてしまう。今私が本当にしなければいけないことは何か？しなくても良い事ばかりやっていないか？」という目で生活を見直す事を心がけるようになりました。

そのためか10年以上たっても再発転移は今のところありません。

私は、人間ドックを毎年受けていたことで早期のがんで発見できたこと。がんになった事で、かわり映えない日々の生活を送れることが有り難いと思えるようになり、自然の見せてくれるわずかな変化に感動を覚えるようになったこと。等がんを体験することで今までと違う第2の人生を送れるようになったと思います。

市町が実施するがん検診(厚生労働省が推進するがん検診)

検診	対象者	受診間隔	検査方法
胃がん	40歳以上	年1回	問診、胃エックス線検査
大腸がん	40歳以上	年1回	問診、便潜血検査
肺がん	40歳以上	年1回	問診、胸部エックス線検査、 喀痰検査
乳がん	40歳以上	2年1回	問診、視触診、マンモグラフィ
子宮がん	20歳以上	2年1回	問診、視診、内診、細胞診

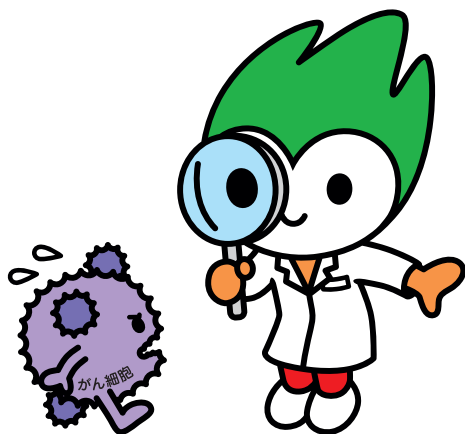
※H28.4.1 から、胃がんと乳がんは以下のとおり変更されます。

検診	対象者	受診間隔	検査方法
胃がん	50歳以上	2年1回	問診、胃エックス線検査 又は、胃内視鏡検査
<p>※当分の間、胃エックス線検査を、40歳以上の者を対象としても差し支えない。また、年1回実施しても差し支えない。</p>			
乳がん	40歳以上	2年1回	問診、マンモグラフィ
<p>※視触診は推奨しないが、仮に実施する場合は、マンモグラフィと併せて実施</p>			

がん検診の問合せ先一覧

市町名	担当課等	電話番号
下関市	成人保健課	083-231-1935
宇部市	健康推進課	0836-31-1777
山口市	健康増進課	083-921-2666
萩市	健康増進課	0838-26-0500
防府市	健康増進課	0835-24-2161
下松市	健康増進課	0833-41-1234
岩国市	健康推進課	0827-24-3751
光市	健康増進課	0833-74-3007
長門市	健康増進課	0837-23-1133
柳井市	健康増進課 (保健センター)	0820-23-1190
美祢市	健康増進課	0837-53-0304
周南市	健康増進課	0834-22-8553
山陽小野田市	健康増進課	0836-71-1814
周防大島町	健康増進課	0820-73-5504
和木町	保健相談センター	0827-52-7290
上関町	保健福祉課	0820-65-5113
田布施町	保健センター	0820-52-4999
平生町	保健センター	0820-56-7141
阿武町	民生課	08388-2-3113
山口県	医療政策課	083-933-2961

がん検診でがんを早期発見しましょう



発行：山口県健康福祉部医療政策課
〒753-8501
山口県山口市滝町1-1
TEL 083-933-2961 / FAX 083-933-2829

